

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	「断層」：詩
Author(s)	梅崎, 春生
Citation	龍南, 233: 61-64
Issue date	1936-02-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7321
Right	

詩

「斷層」

ゆきすりの男も女も、濡れたしきいしにあしあとをのこし、凍りか
かつた舗道の上にあしあとをのこし（たとへばくだものや。歪んだ
鏡面に二重にうつるなし、りんご、ばなな、ばいなつぶるが、きち
がひじみた不調和を氾濫させ、赤い襟つけたくだものやのむすめは
着ぶくれて、はれた手の甲を小火鉢のとほしい炭にかざし）みせに
ならべたりんごのひとつが、行客の袖にかかつて、ころころと、し
めつた土間にころげ落ちる。こよひ、にぶい灯はわびしい巷にたち
ならび、雑音騒音はまちのすみすみからわやわやわやとたち、男も
女もうつけた顔貌のはしはしにまでただれた神經の尖端をぶらぶら
させて、犬のやうにあへぎながらあるく。くだものや。ほんや。ご
ふくや。そばや。かすかすの醜悪なる生活の斷層。その生活の論理
を一步もふみはづさないやうにあえぎながら。歳末の街を、いたま

梅 崎 春 生

しいほど苦しさにあえぎながら。(そのところからこころへわなのごとくはりわたされたるあひ言葉。ここにすすけたる町人根性。——今日も無事の日が暮れよと。)

があがあとらちおがそらなりをし學生等は下駄をはいて町かどをまがり(もつものほうつろなる誇りとかなしほどもづしい思想と牡犬のやうな春情)肌さす十二月の風がはたはたとまんとの裾をひるがへす。(めんめんとなつらなりむせぶ習俗のうた)巷よ。ほんやにたかる只讀みのむれ。店眞の油断をうかがふ萬引常習女。くだものをねぎるわかいをとこと。ああ、ここでも鎧のやうに厚い習俗の壁をつきやぶり、ただいちどでいいからあの新鮮なひかりをみちびきいれるひとびとはゐないのか。社會なべに冷酷な目をそそぎながら歳末の人出は小便のやうにながながとつづいてゐる。(めがねをかけたみにくい女士官の顔にかがやきわたるいやしむべき誇りの表情よ)

入口が暗い小さな喫茶店の扉を肩おして出入するをとこたち。冷たいかほでかれらを送迎する喫茶店のわかいをんなのうるんだひとみ。隅のぼつくすには肩はばひろい街のごろつきたちが、すとあぶ

のまはりにはにきびをもてあましたやうな學生たちが（かれらは政治の將來をかたり）機關銃のごとき亢奮をおしかくし何氣なく煙草を吸ひながら（かれらは哲學の動向をかたり）相手への嫉妬と反感に燃えたつて（かれらは文學の貧困をかたり）喫茶店のおんなのゆたかなこしをぬすみみる。おのれへのただひとたびの媚笑をいまかいまかとまちこがるる——そのひととき。舌は煙草と珈琲とではぶらしのやうに爛れはてて（をんなは蓄音器の針を代へながら、痛みだしたる子宮の疾患にあえぐ）

そのひとときよ。巷の溫度は急速に下降しはじめるのだ。（商店のどくどくしい廣告ばかりが妖しく風をはらみ）ゆききがたえ、白き舗道にゆききがたえる。（ただちらほらとあゆむものはえものさかす街の狼とかへりをいそぐ支那そばや。ああ、ちやるめらで十二月のそらにふきならすかなしげな生活のうた）やけのやんばちに酔つばらつたいくたりのをところが、ぼすたあをはがし電柱をたたきあはるひは凍つたみちにすつてんころりんところがりながら、きちがひじみた聲をはりあげて（どんがらがんとんがらがんとうたふのだよ涙を流してうたふのだよ。どんがらがんとんがらがらかんと）

劫初より末世まで吹きすさむ巨大なる颯風。巷はその颯風の眼になり、一步一步するどく虚無へよろめくのだ。その顛落をわづかにささへる一枚のうすい壁を（そのうすいかべをつたつて學生等はかへつてゆく。耳にのこる勘定の白銅のうすらさむいおと）凍つたしきいしに下駄のおとがからころとひびき、つめたい空風のなかで下駄のおとがからころとひびき（つきがでてゐる。猛獸の口のごとく血のいろでいつばいとなり、銀行の鐵扉をふるへさせると）電柱はなみだをたれ電線はなみだをたれ、巷はこのまま死滅のみやこだ。巷よ。その町角をその並木をその舗道を、ひろびろと金魚のごとく泳ぎわけそらにむかつてむなしく咆哮するもの。水銀柱は零下八度をしめし、そのまま、そのまま巷は觸手の方向を失ふ。